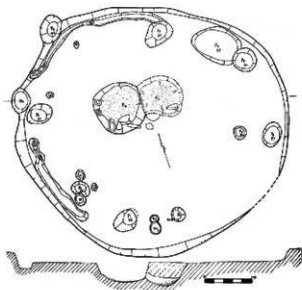


第2節 遺構及び遺物



写真2 第1～6号住居址(東より)



第3図 第1号住居址実測図(S=1/80)

1. 第1号住居址(第3, 4図 写真2, 3)

本住居址は東に第2号住居址と接する。プランは円形で、大きさは径5.5m前後である。

壁高は30cm前後を測り、床面は平坦で固い。東壁は第2号住居址と接し崩落している。複合はしないと思われる。

炉址は中央北寄りにあり、2ヶ発見されている。共に方形石組み竪穴炉で石は抜かれている。F₂を調査中東壁がフラスコ状になり、黒色土と焼土がローム土の下に続くため、床面を壊ったところ、F₁が確認された。ものである。10cmほどの黒色土がみ

られ、その上はローム土が埋めている。F₁の上に貼り床を行い、となりに新しく、別の炉 (F₁) を作ったもので住居址の建て替えに伴う炉の移動である。

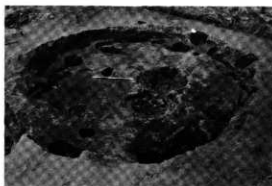
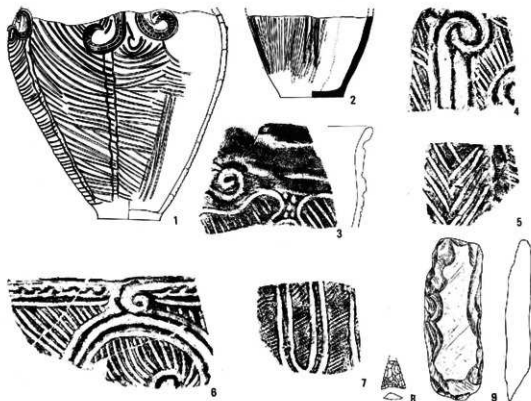


写真3 第1号住居址 (東より)

柱穴も当然移動したと考えられるが、貼り床はみられず、どの柱穴が粗をなすかは不明である。平面プランや周溝などにも建て替えに伴う顕著な動きはみられず、古い住居址のプラン、規模は不明である。

住居址中央南壁がわ、P₁とP₁₁の間に埋裏が接して2ヶ発見された。共に正位の埋裏である。埋裏2 (第4図-1) が埋裏 (第4図-2) の1部を壊って埋設している。

住居址の建て替えによるものと思われる。同様の例は長塚遺跡第3号住居址例¹⁾がある。



第4図 第1号住居址出土遺物 (1, 2-1/6, 3-9-1/3)

遺物(第4図) 1は正位の埋設資料(埋裏2)で口縁部を欠く変形土器である。チョコレート色に固く焼かれている。胎土にわずかに砂粒を含んでいる。外面上部には炭化物の付着がみられる。輪積み痕が明瞭に残る。文様は隆帯によるワラビ手文を2個1単位として、その下部に2本の沈線の蛇行文が懸垂し、間を沈線が弧状ないし斜走して埋める。

2もやはり埋設資料(埋裏1)で胴上半部を欠く。一部は埋裏2によって壊され離れて出土した破片を復元したものである。器形は不明であるが、深鉢と思われる。文様は3~4本の懸垂文を4分に器面に配し、条線が縦走して間を埋めている。

1, 2の土器の形式の差についてであるが、2(埋裏1)の方が若干新しいと思われ、埋裏の埋設状態と逆の関係を示している。このような例は先にあげた長塚遺跡第3号住居址にみられ、会田進氏は報文の中で「土器の廃棄された時期と製作された時期についての問題であるが、……壊された土器の方が新しく、廃棄の時期が逆転している。またこのことは両者の使用の時期が全く同一であったことを意味しよう」と述べている。この逆の関係を考えるには会田氏が指摘するとおり考えなくては解決できない。我々が住居址内出土一括土器としているなかにもある程度、先行する土器が使用され廃棄されたことも当然考えられるところである。

更に住居址の建て直ししないし建て替えに伴って古い埋裏が壊され新しい埋裏が埋設されることについて会田氏は同報文の中で様々の角度から論及されている。埋裏の性格を考える上で重要な指摘である。

3~7は覆土中に発見されたものである。4, 6など先行するものである。

石器は黒曜石製の石鏃(8)と安山岩製の打製石斧(9)の2点が出土している。石鏃の調整は丹念に行われている。打製石斧は自然面を残すものである。(吉村 進)

※1 「長塚遺跡」 岡谷市教育委員会 昭和46年

2. 第2号住居址(第5, 6図, 写真2, 4, 5)

遺構 第1号住居址の東に接して発見されたもので、プランは隅丸正方形で大きさは5.3 mである。

壁高は東で30cmを測り、床面は平坦で固い。

柱穴のある所をのぞいて岩溝が周る。内部には小ピットはみられない。

炉址は方形石組み堅穴炉で中央北西寄りに位置し、石はすべて抜かれている。焼土は3cmほど堆積がみられる。

遺物の出土状態についてふれておく(写真4, 5)。P₁とP₂の中間床面上に高台付き土器(第6図-1, 2)と小形深鉢(第6図-5)それに破片であるが朱を塗った埴形土器の破片が接して横倒しの状態で出土している。更に炉址の内部焼土のすぐ上に大形深鉢2個体分(第6図-3, 4)があたかも投げ込まれたような状態で入り混って出土している。また炉址のすぐ東に石皿の半完形品(第6図-4)が発見された。他の石器の出土数も多く20点を超えている。

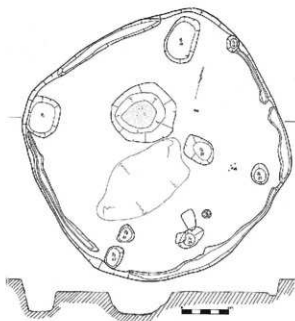
遺物(第6図) 1, 2は高台付き土器で文様、器形は非常に類似する。口唇はわずかに内屈し、頸部から球状にふくらんで脚を持つ。1は脚もほどよく広がり全体にバランスが取れているが、2



写真4 第2号住居址炉址



写真5 第2号住居址土器出土状態



第5図 第2号住居址実測図 (S=1/80)

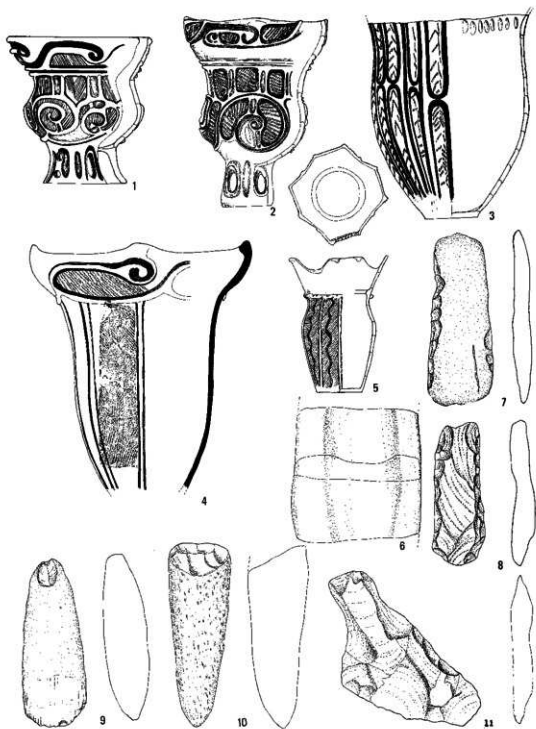
浅いU字状の沈線によって長楕円文が表出され、内部は綾杉状に縄文が施される。原体の押圧によるものであろう。4と一括出土したことから口縁部にも文様帯を構成し、土壌4出土土器(第21図)に類似すると思われる。口縁部破片はまったくみられなかった。

4は底部を欠損する深鉢で3同様欠損部の破片はまったく発見できなかった。黒褐色に固く焼かれ胎土中には砂をわずかに含んでいる。器内面胴下半部と外面口頸部には炭化物がこびりついている。小突起を4つ持つ口縁部はワラビ手文をつないで楕円文を表出し、縄文が埋めている。胴部は縄文地に平行沈線が懸垂する。3、4は関東地方の加曾利E式に非常に類似する。3にみられる綾杉状文は曾利式の影響を受けたものであろうか。

5は小形深鉢で口縁部は台形状の突起を4ヶ持ち八角形を示す。口唇上部には2列に刺突が施さ

は不安定である。文様は口縁部と胴部とにわけられ、口縁部はワラビ手文をつないで、楕円形などを表出し、胴部は渦文を配して区角を描く。区角内部は1は浅い平行沈線、2は縄文がうめる。1は砂をわずかに含みチョコレート色に固く焼かれている。器面調整も良好である。2は赤褐色に焼かれているが、器面はササクレだったような感じをうけ、粘板状の剝離を示す。共に輪積みの痕を残す。

3、4は炉内よりの出土である。3は口縁部を欠くが4と同様の深鉢と思われる。黒褐色に固く焼かれている。輪積みの痕を明瞭に残す。一部器内面に指頭痕がめぐる。器面調整時のものである。文様は



第6图 第2号住居址出土遗物(1~6-1/6, 7~11-1/3)

れる。内面頸部に1条段がめぐる。褐色に焼かれるが焼成はあまり良くない。器面内外とも炭化物が付着するが、特に内面胴下半から底部にかけては皮膜状をなしている。文様は頸部を横定する刻みを持つ粘土紐によって分けられ、口縁部は無文帯で胴部にみられる。縄文を地文とし、磨消縄文をはさむ平行沈線が器面を8分し、その間に沈線の蛇行懸垂文が走る。

3, 4, 5は加曾利EⅡ式に比定でき、1, 2は先行するものである。しかし、1, 2と5は一括出土であり、同時に使用されていたことは明らかである。

石器の出土数は17点を数える。6は石皿の半完形品で砂岩製である。7, 8は硬砂岩製の打製石斧で7は縁辺の一部に調整がみられるだけである。9, 10は孔棒状石斧で9は部分的に研磨される。石材は9が緑泥岩、10が蛇紋岩である。11は硬砂岩製の大型粗製石匙である。

遺物の出土状態は遺構のところで述べたとおりであるが、当住居址例のように炉址内の焼土のすぐ上にはおり込んだような状態で土器が壊れて出土することが往々にしてある。住居址の埋没に伴うものでなく明らかに意図を持って行われたと思われる。本住居址についてみれば、炉石は抜かれているが、床面上に完形土器が一括出土したり、石器が多量に出土していることを考えると住居址の廃絶の契機が重大な事によるものではないだろうか。炉石を抜いたのがその家族によるものか、埋没がある程度進んで他のものによってのものかは不明である。このように一括廃棄したようなとき、炉石だけ抜くという行為は不自然と思われ、後者の可能性が強い。

特殊な土器である高台付き土器を2個体と破片ではあるが朱を塗った碗形土器が出土し、一般的な住居址の土器様相と異にしている。集落における特殊な性格を持つ住居址と考えたい。(吉村 遼)

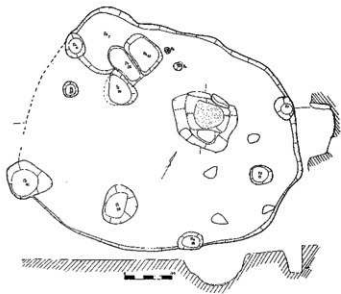
3. 第3号住居址 (第7, 8図, 写真6)

遺構 第3号住居址の南西に位置し、南東には第4号住居址がある。

全体に掘り込みは浅く西側では、壁はなくなっている。プランは不整の楕円形を呈し、大きさは5.8×4.9mである。

壁高は東で約10cmを測る。床面は平坦で良好である。

炉址は住居址北東寄りに偏し、方形石組み竈穴炉で北側を除き炉石は抜かれている。掘り込みは深く70cmを測る。焼土は3cmほど堆積している。内部より小形深鉢(第8図-1)が倒れ込むような状態で出土している。



第7図 第3号住居址実測図 (S=1/80)

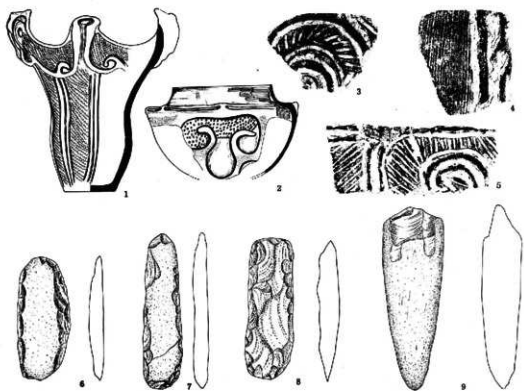
遺物(第8図) 1は炉内より出土した小形深鉢土器で、せりあがり状の把手を4ヶ持ち、それから発する粘土紐によって口縁部文様帯は作られ、内部は縄文が埋められている。胴部は縄文を地文として磨消縄文をはさんだ3本の平行沈線が器面を8分面に懸垂する。全体に黄色を呈し固い焼きをみせる。器内外とも炭化物が部分的に付着している。

2は口縁部が小さく頸部から上半部が強く張り出した特異な器形の土器である。器形的には有孔罎付き土器の流れをくむものと思われる。胎土はち密で器面調整は丹念に行われており、器内面にはへら削り手法がみられる。褐色に焼かれている。外面には炭化物が付着し、部分的であるが朱が塗られている(ドット部)。文様は口縁部は無文で張り出した胴上半部は隆起し、削り取ったような溝がみられる。罎の退化したものであろう。胴部は幅広い粘土を使って文様を描き円形の刺突文が施される。

3~5は床面直上から出土したもので、3、5は隆帯による渦文を持つもの、4は懸垂文と縦走する条線を持つものである。



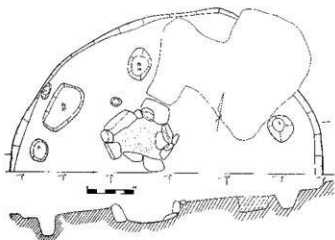
写真6 第3号住居址炉址



第8図 第3号住居址出土遺物(1, 2-1/6, 3-9-1/2)

総じて加曾利EⅡ式に比定でき得る。

石器は乳棒状石器（第8図-9）を除いては他は全て打製石斧である。6、9は自然面を大きく残すものである。9は緑泥岩製、他は硬砂岩製である。（北沢雄喜）



第9図 第4号住居址実測図 (S=1/80)

4. 第4号住居址 (第9図, 写真2)

遺構 第3号住居址の南東に接して発見されたもので、南側は開田によって破壊されている。プランは円形を呈すると思われ、東西6.7mを測る。壁高は10-15cmで、床面は固く良好であるが、わずかに凹凸がみられる。

炉址は方形石組み竪穴炉で炉石は完全に残っている。掘り込みは約40cmである。焼土がうすく堆積している。炉の北から住居址北東部は大きく掘られ攪乱されている。

柱穴は6本を基本とするであろう。

遺物は縄文時代中期加曾利Ⅱ式の土器片がわずかに出土したのみである。（和田武夫）

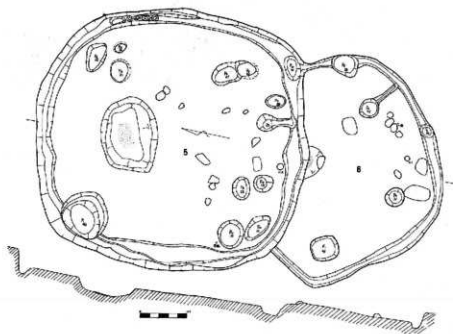
5. 第5号住居址 (第10, 11図, 写真2, 7)

遺構 第2号住居址の北東にあり、南側で第6号住居址を切っている。その比高は25cmを測る。プランは隅丸方形を呈し、大きさは南北5.8m、東西5.6mである。

壁高は北で35cm、床面は全体に平坦で固く堅ちである。

幅30cm前後、深さ20cmほどの周溝が一周する。東側に部分的であるが小ピットがみられる。

柱穴は4本を基本とすると思われるが、 $P_2 \cdot P_6$ 、 $P_3 \cdot P_4$ 、 $P_5 \cdot P_7$ と対をなすのは住居址の建て替



第10図 第5、6号住居址実測図 (S=1/80)

えが考えられる。

炉址は中央北に偏し、方形の石組み竪穴炉で炉石は抜かれている。掘り込みは30cmほどで中央部に炭土がわずかに堆積している。

中央南側周溝わきに底部を抜いた正位の埋甕(第11図-1)が発見された(写真7)。埋甕の南には溝が、北には自然石の置き石が2個みられる。大城林遺跡第17号住居址例同様、区角された埋設として注目したい。第6号住居址も同じと思われる。

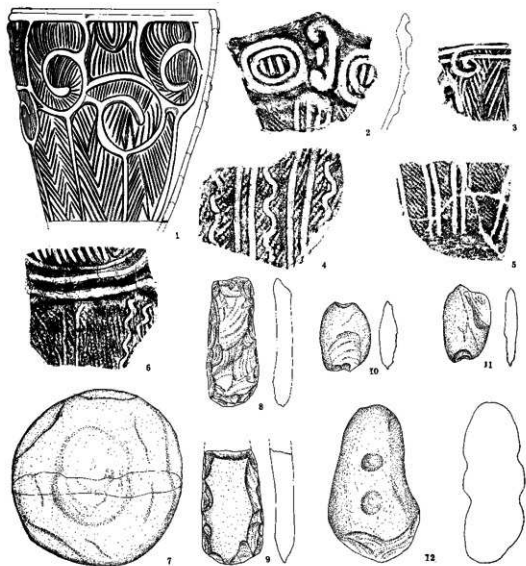
更にP₁₀の北に石皿(第11図-7)が出土した。

遺物(第11図) 1は正位の埋設資料で底部が抜かれた壘形土器である。胎土はち密でチョコレート色に固く焼かれている。器面調整は丹念である。文様は隆帯の渦文つなぎで器面一杯に唐草風の文様を描き、空白部は太い沈線をもって埋めている。内面胴下半部には炭化物の付着がみられる。曾利Ⅱ式に比定できる。

3も同様の施文を持つもの。他は胴部に縄文を持つもので関東地方の加曾利式に類似する。総じて加曾利EⅡ式に比定できるが、1はそのうちでもやや先行するものである。石器は石皿(7)、打製石斧(8、9)、石錘(10、11)、凹石(12)がある。



写真7 第5号住居址埋甕



第11図 第5号住居址出土遺物(1, 7-1/6, 他は1/3)

石皿は花崗岩製でわずかにくぼむ程度である。打製石斧は共に硬砂岩製で9は自然面を残すものである。石錘は当遺跡住居址の内では唯一の出土で、両端を大きく打ち欠いたものである。共に硬砂岩製である。凹石も唯一の出土である。石材は砂岩である。(吉沢文夫)

8. 第6号住居址(第10, 12図, 写真2, 8)

遺構 第5号住居址によって北側は切られている。プランは胴張り方形を呈すと思われる。推定規模 4.6×4.4 mである。

炉址はほぼ中央北東寄りに位置し、床面をわずかに掘り込んで石を組んだものと思われる。形は炉の北側半分が第5号住居址によって壊されているため、はっきりしないが、円形を呈すと思われる。炉石は抜かれている。薄く焼土の堆積がみられる。

壁高は南で25cmを測り、床面は大方平坦で固く良好である。幅30cm前後の周溝が周る。

柱穴はP₁、P₄、P₃と思われ、第5号住居址のP₄かP₃、ないしP₇は当住居址の柱穴と考えられる。

入口はP₁とP₄の間と思われる。

南壁ぎわP₃とP₄の間に口辺部と底部を欠いた埋裏(第12図-1)が発見された。埋裏の西に自然石が2ヶ置かれ東側にも離れているが置き石がみられる。第5号住居址同様区角された埋設と思われる。

なお埋裏の東側の置き石に倒れかかるように壺形土器が出土している(写真8)。

遺物(第12図) 遺物の量は非常に少ない。土器は1、2の他に破片がわずかに出土しただけ、石器はまったく発見されなかった。

1は埋設資料で口辺部と底部を欠いて胴部のみのものである。深鉢と思われる。胎土はち密で器面調整も良く黒褐色に焼かれている。外面には一面に炭化物が付着している。文様は縄文を地文とし細沈線が蛇行文、渦文、懸垂文などを描くものである。諏訪地方において曾利期の初期に伴出することが知られている。

2は胴下半部を欠く壺形土器である。頸部は短く口縁は立ち、口唇が肥厚し若干外反する。胴部は大きく張る。器内面はヘラ削り手法によって丹念に調整が行われ、レンガ色に固く焼かれる。胎土には砂をわずかに含む。文様は粘土紐を3本横走させ、その間には蛇行文をめぐらして飾り、胴部は縄文地にワラビ手文つなぎや蛇行懸垂文、磨消縄文をはさむ3本の沈線などを施す。類例をあまり知らないが、飯島町鳴尾天白遺跡第5号住居址出土例^{※1}がある。1と時期的には大差ないと思われる。

(田中清文)

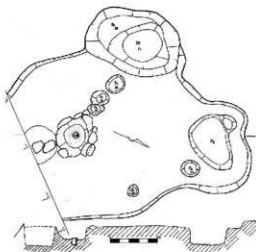
※1 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 — 上伊那郡飯島町地内 その1 —」 昭和46年度 長野県教育委員会



第12図 第6号住居址出土遺物(1/6)



写真8 第6号住居遺物出土状態



第13図 第7号住居址実測図(S=1/80)



写真9 第7号住居址炉址

遺物が充滿した小形深鉢(第14図-1)が埋められており、埋藏炉である(写真9)。なお、石組みの一部は攪乱のためくずれている。

P₇、P₈は当住居址に属さずに単独の土壌の可能性もある。

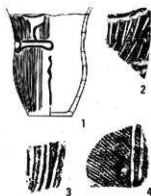
遺物(第14図) 遺物は非常に少なく炉内より出土した1を除けば土器片が数片出土しただけである。1は口縁部を欠く小形深鉢である。明るく固い焼きをみせる。胎土には砂、長石をわずかに含む。輪積み痕を明りように残す。内面にわずか炭化物の付着がみられる。文様は器面一杯に条線が縦走り、くびれ部は横帯に沈線が描かれる。曾利Ⅲ式に比定される。

(福沢正陽)

8. 第8号住居址(第15、16図)

遺構 第7号住居址の北西に位置し、その間には土壌がある。

プランは径5.2mの円形の北側部分に張り出しを持つもので、張り出しを含めると南北の長さは、



第14図 第7号住居址出土
遺物(1-1/6, 2-4-1/3)

7. 第7号住居址(第13、14図、写真9)
遺構 調査区域の東端に位置し、南東部は畑によって切られている。

プランは張り出しを2ヶ所に持ち、不整であるが楕円形に近い。短径3.7mで、長径は4.2m前後と思われる。

壁高は15cm前後を測る。床面は軟弱である。炉は中央南東に偏し円形石組み型穴炉である。掘り込みは25cmほどあり、中央部に炭化物が

6.6 mである。

壁面は15cmほどで床面はタタキがみられ固く良好である。

炉は北東に偏し、床面を15cmほど掘りくぼめただけのもので地床炉である。蜂の巣状に小ピットがみられるが機能は不明である。焼土は5cmほど堆積している。

P₀の東に小形土器(第16-1図)が胴上半部下を埋め込んだ状態で発見された。埋嚢というのは床面下に埋める土器といわれ、本例のようなものは埋嚢でないといわれてはならないが全く無視してはならないであろう。

遺物(第16図) 1は胴長の小形深鉢である。口唇は肥厚して段を作る。文様は頸部に平行沈線を描き、口縁部と胴部文様帯とに分けられる。口縁部は沈線によって蛇行文や懸垂文で描き、棒状工具の先端による刺突文を埋める。胴部は縄文地に蛇行懸垂文が走る。胎土はち密で固く焼かれている。内面には炭化物の付着がみられる。他も縄文を地文とするものである。総じて曾利田式に比定できる。

石器は打製石斧のみである。7は大形石斧で自然面を残す。共に硬砂岩製である。(田中清文)

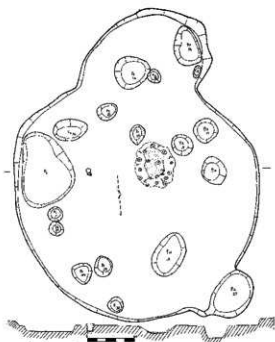
9. 第10号住居址(第17, 18図, 写真10)

遺構 第8号住居址の南西に位置し、北には土壇群がある。南は開田によって破壊されている。

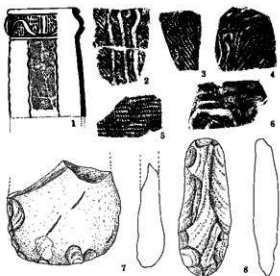
プランは円形と思われ、径5.3m前後を測るであろう。

壁高は25cm、床面は平坦で固く良好である。

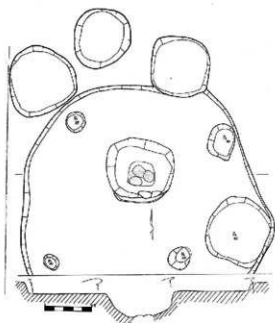
炉址は中央北寄りに位置し、方形石組



第15図 第8号住居址尖測図(S=1/80)



第16図 第8号住居址出土遺物(1-1/6, 2-8-1/3)



第17図 第10号住居址実測図 (S=1/80)



写真10 第10号住居址と土坑群

み竪穴炉で一部を除いて炉石は抜かれている。

P₁は貯藏穴的用途を持つと思われる。

遺物(第17図) 遺物は少ない。

1は把手を持つ甕形土器である。文様は隆帯を使って区角し楕円文、蛇行文、綾杉文などを描くものである。

2は口縁部破片で楕円文を配し、縄文が内部を埋めている。

3も口縁部破片で縄文が羽状に施されるものである。類例をあまり知らない。

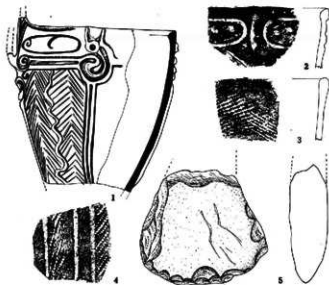
4は加管II的様相を持つものである。

管IIないしIII式に比定できる。

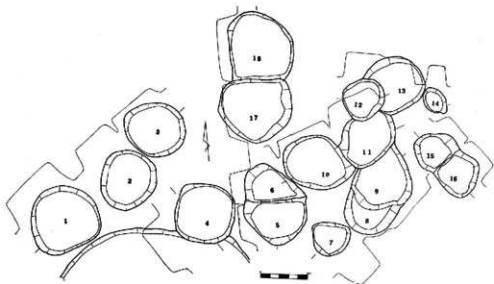
石器は大形打裂石斧が一点しただけである。硬砂岩製で自然面を大きく残す。(和田武夫)

10. 土坑(第19, 20, 21図, 写真10, 11)

第10号住居の北と、第7号、8号住居の間に土坑が確認さ



第18図 第10号住居址出土遺物(1-1/6, 2-5-1/3)



第19図 土壌1～18実測図 (S=1/80)



第20図 土壌19～21実測図(S=1/80)



写真11 土壌4土器出土状態

れた。その数は22基である。

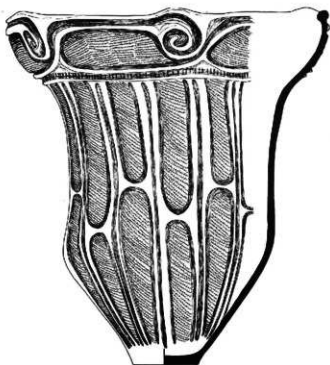
形状は円形ないし不整形を示すものが多く、切り合うものもみられる。

内部からは土壌4を除いては土器片がわずかに出土するのみである。

土壌4からは床面に大形深鉢が横倒しにつぶれて発見された(写真11)。第21図がそれである。胎土には砂粒をわずか含み器面調整良くレンガ色に固く焼かれている。口縁部は隆帯の溝文つなぎを施し楕円文を作り出して内部は縄文がうめる。胴部は縄文を地文にして、浅く断面がU字状を示す沈線がU字文を描くもので、磨消縄文手法がみられる。

加曾利E.II式に比定できる。

(吉村 進)



第21図 土壌4出土土器 (1/6)

第IV章 ま と め

今回の調査は予算面で調査面積を縮小さざるを得なく小規模な発掘に終わった。発見された遺構は縄文時代中期のものに限られ、住居址9基と土壌22基である。既に各項で詳細は論じたので簡単に記して参考に資したい。遺跡の範囲であるが、調査区域の北及び西に広がる大集落と思われる。出土した土器構成は加曾利EⅡ式、曾利ⅡないしⅢ式を主体とするものである。

住居址のプランは円形を基調として、隅丸方形、扇張り方形、楕円形がみられる。炉の形態は、方形石組み竪穴炉が多く、地床炉は第8号住居址のみである。大城林遺跡、北方Ⅰ遺跡でみられたと同様な傾向をみせている。石器についてであるが、第22図が住居址別の出土一覧表である。

住居址番号	種類	打製石斧	磨製石斧	石匙	石鉢	石皿	石臼	乳棒状石器	横刃形石器	石磨	その他	計
1	2								1			3
2	11				1		2					14
3	5	1						1				7
4												0
5	2			2	1	1						6
6												0
7												0
8	3											3
10	1											1
計	24	1		2	2	1	3		1			34

第22図 住居址別石器一覧表

石器の出土量は比較的少なく全部で37点である。やはり打製石斧の卓越が知られる。大城林遺跡や北方1遺跡で多く出土した横刃形石器の出土はみられない。中に剥片に若干剥離痕らしきものを持ったものがみられるが定かでない。

大城林遺跡で指摘したが富士山遺跡でも、他に比べて多く石器を残す住居址がある。更に石鏡も一軒の住居址だけから出土している。

付

昭和47、48年の2年3次にわたる遺跡の調査は各項につきるが、数多く発見された埋襲について資料の集成を行ってみた。

埋襲については、神村透氏が集成と研究史・分析を行っている。²⁾資料の集成方法は同氏の方法に従い、対比できるようにした。

埋襲の内部は住居址の覆土が充滿し、自然堆積状態である。内部よりは全く異物は検出されていない。

埋襲といっても残存状態、あるいは位置など様々な場合が認められる。また住居址の方向の問題、埋襲を持つ住居址と持たない住居址の関係など、派生する問題点が多いが、現在そこまで言及できないので、資料の集成にとどめておく。

表1 北方遺跡住居址及び埋襲一覧表

住居番号	プラン	規模	形状	主軸方向	埋					時期	その他					
					No	方向	ズレ	距離	距離比			姿勢	石蓋	形式	位置	
1	隅丸方形	5.5×6	凹形 竪穴炉	S45°E							曾利					
2	不整形 凹形	5×4.9	石鏡方形 竪穴炉	N70°E	N82°E	△12°	285.45	86:14	正	無	D	深鉢	前	曾利	第1号件によって埋襲が壊されている。	
3	隅丸方形	4.3×4.2	石鏡方形 竪穴炉	S70°E	S57°E	右17°	262.10	96:4	正	無	H	深鉢	前	曾利	西と家に隣接あり。	
4	円形	5.3×5.1	石鏡方形 竪穴炉	S90°E										曾利	第2号件を切り、第5号住に切られる。西に埋襲あり。	
5	楕円形	4.1×5.2	石鏡方形 竪穴炉	S64°E	1	S58°E	左6°	218.30	88:12	正	無	G	竪	前	曾利	西と東に隣接あり。ピット内に埋襲土器ある(2ヶ所)
					1	S36°E	左28°	216.30	88:12	正	無	G	竪	前	曾利	
6	隅丸方形	4.6×4.5	一部 石鏡方形 竪穴炉	S67°E	1	S45°E	右22°	230.40	85:15	正	無	G	深鉢	前	曾利	
					2	S69°E	右2°	233.38	85:15	正	無	H	深鉢	前	曾利	
7	電気角形	5×5.5	石鏡方形 竪穴炉	S40°E	S51°E	右11°	250.30	89:11	正	無	B	竪	前	曾利		
8	楕円形	5.5×4.5	五角形 石鏡炉	S81°E											墓内～井戸尻	
9	隅丸方形	5×5.7	石鏡方形 竪穴炉	S56°E	S70°E	右14°	265.35	88:12	正	無	G	竪	前	曾利	埋襲は口部を欠いたためGに入れる。炉内は石が×××××まれる	
10	不正 凹形	5.3×5.6	石鏡方形 竪穴炉	S88°E	1	S56°E	△32°	315.25	92:8	正	有	G	竪	前	曾利	第11号住に貼り添する
					2	S56°E	△32°	260.80	76:24	正	無	H	深鉢	前	曾利	
					3	S68°E	左20°	265.25	92:8	正	無	A	深鉢	前	曾利	
11	隅丸方形	4.4×5.1	石鏡方形 竪穴炉	S38°E	S8°W	右47°	238.18	93:7	正	無	H	深鉢	前	曾利	第10号住に貼り添される。	

表2 富士山遺跡住居址及び埋竈一覧表

住居 番号	プラン	規模	形状	主軸 方向	埋				竈				時期	その他		
					方向	ズレ	距離	距離比	表 形	石 蓋	形 状	器 形			位置	
古 1			方形石積 竈穴	S17°W	S24°W	左7'			正	無	D		前	有利	新しい埋竈によりこわさ れている。	
	新	円形	5.5×5.5	方形石積 竈穴	S27°E	S2°W	左29'	275:42	87:17	正	無	D	焼	前		有利
2	楕圓 方形	5.3×5.3	方形石積 竈穴	S22°E											有利	
3	不整 楕圓形	5.8×4.9	方形石積 竈穴	S9°E											有利	
4	円形	6.7×?	方形石積 み竈穴	?											有利	埋竈の有無は不明。
5	楕圓 方形	5.8×5.6	方形石積 竈穴	S12°E	S1°W	左13'	342:54	86:14	正	無	B	差	前	有利	区角されている。	
6	楕圓 方形	4.6×4.4	円形 石積竈	S42°W	S12°E	右54'	215:45	96:4	正	無	H	深鉢			有利	区角されている。
7	不整 楕圓形	3.7×4.2	円形石積 み竈穴	?											有利	埋竈。
8	不整 円形	6.6×5.2	地床	S49°W												竈上半部下を埋め込んだ 小形深鉢出土。
10	円形	5.3×5.3	方形石積 竈穴	S8°W												

表の見方は神村氏の分類方法に従ったが一応ふれておく。

縄文時代中期になると炉は中央より片寄った所に位置して行く。そしてその前方が入口と予想され、炉によって前、奥の区別を行い、入口の方から右、左の区別を行っている。埋竈の方向は炉の中心と埋竈の中心とを結ぶ線の南北線とのズレをみ、距離は炉の中心から埋竈の中心までの距離を左に、埋竈から壁下までの距離を右に表した。ズレは主軸方向と埋竈の方向との差を右、左で表した(神村氏は左のものを一、右のものをトとしている)。

形式は土器の残存状態によって区分し、A—完形、B—完形であるが底部を抜く、C—完形で底部穿孔、D—口辺部を欠き底部まで残る、E—口辺部を欠き底部を抜く、F—口辺部を欠き底部穿孔、G—胴下半を欠く(口辺部のみを含む)、H—口辺部と胴下半を欠き胴部のみ、I—胴下半で底部を残す、J—胴下半で底部をぬく、K—胴下半で底部穿孔のII区分し、埋設方法により正位、逆位とした。

※1 神村透「南信地方の埋竈について—その学史と事例—」長野県考古学会誌15号 昭和47年

発掘作業協力者名簿(順不同)

倉田 源 重	大 野 吉五郎	小町谷 元
長谷部 重	小町谷 すみ子	小町谷 春 子
田 中 春 子	池 上 ふさえ	池 上 ちとし
倉田 さつ	下 村 修	

記録保存をおえて

昭和45年より始まった県営ほ場整備事業に伴う発掘調査は、本年度をもって上穂地区分が終了したわけであるが、本当に感慨無量なものがある。

大正年代、烏居龍藏博士によって美女森・大城林遺跡など多くの遺跡が注目されたことから、当地方の古代史・考古学研究が始まったのである。終戦を経て昭和28・29年には博物館下村忠比古・小池金義氏・筆者が中心となって、77遺跡223地点の調査を行った。その当時は開田によって破壊された遺跡があったとはいえ、残された遺跡を綿密に調査することによって、古代文化の復元も可能な状態であったが、しかし当時では予想もしなかった今回の大規模なほ場整備事業の前にあえなく壊滅してしまっただけである。

生まれ変わったほ場整備のあとに立った時、面的な遺跡破壊の中ですべての遺跡の記録保存をなすことはできなかったが、せめて我々の力の及ぶ限り調査した発掘記録の貴重であることを再認識すると同時に、この記録を後世に伝える義務を痛感するものである。

国道153号線より西の遺跡について概況を記して参考に資したい。

赤穂地区に所在する遺跡は、木曾山脈より流れ出る大小河川に沿っているものと、地形的成因不明の段丘上下に分布するものとに分けることができる。

古田切川沿岸に所在する遺跡としては、上流に北原遺跡がある。かつて縄文時代前期・中期の遺物を採集してあったが、一部の地点の発掘に終わってしまったことは残念であった。

中流には富士山遺跡がある。当遺跡は昔からこの地方の人々が土器や石器を多く捨てており、市内でも有数の遺跡である。種々の事情から一部の発掘に終わったが、大集落の存在をうかがわせるものがあった。詳細は前述の通りである。

その外下流に数遺跡あるが、今後の調査区域であるので省略する。

女体部落の北から久保部落を流れる川に沿って久保遺跡がある。この付近は渥田となっており、遺跡はその南と北にある。開田当時、炉址などが発見されたとのことだが、未調査のまま破壊されてしまった。

久保遺跡と北原遺跡の中間に切石遺跡がある。昭和47年、中央高速自動車道駒ヶ根インターチェンジ建設のため、中央道埋蔵文化財発掘調査団の手で調査が行われた。その結果、遺構の発見はなかったものの、縄文時代前期・中期・後期の土師器や石器が出土している。

女体部落の中央を流れる小河川の両岸に女体遺跡がある。西は中央道通過地点から東は坂木部落の北側まで約600mに及ぶもので、その大部分は水田となっている。昭和46年、付近一帯の分布調査を実施しており、倉田氏の畑より縄文時代中期の住居址が確認されている。開田中に石囲い炉や土器が出土している。更に昭和47年中央道調査団の手によって平安時代の住居址1基が発掘されている。

女体遺跡の東方、七面川左岸段丘上に城遺跡がある。古くから土器や石器が出土したことで知られていたが、最近の宅地化に伴い調査不可能となってしまった。

鼠川の右岸上流には、中原・上の原遺跡がある。ほ場整備地区対象外となったことは幸いであっ

た。

その東方段丘には、塩木遺跡が広がる。昭和28年、山崎氏の畑より縄文時代中期の住居址が確認され、その後付近開田中に多くの遺物が採集された。昭和47年遺跡の東端部の発掘調査を行った。成果は報告書にみる通りである。

これよりやや下った右岸には神川遺跡がある。発掘調査は行わなかったが、開田時に縄文時代中期の遺物が出上っている。

塩木遺跡を南へ風川を渡ると段丘下に春日遺跡がある。上流沢川上流にあたり、この付近は自然流路の発達が顕著で微地形をなしている。上穂沢川の両岸には多くの遺跡があり市内でも有数の遺跡群の一つである。

当遺跡は昭和28年稚蚕所建設のおり発見されたものである。昭和45年12月、は場整備事業に伴い、調査を行ったところ縄文時代中期の住居址を6基発見した。しかし非常に限定された発掘区域で終ってしまったことは残念であった。詳細は報告書「藤助畑・春日」が発刊されているので見ていただきたい。

八幡原遺跡は、八幡北おとしと源藏川とはさまれた台地上に位置する。安性寺遺跡はその東に続く遺跡である。両遺跡とも開田時に破壊されており、川のあぜには炉石や土器・石器が山と積まれていた。

上の原遺跡は大城林遺跡同様古くから知られていた。山林であったが、大正年代盛んに開田が行われるに至り、注目されるようになった。当時、数箇所に加址が発見され、焼上や木炭が出土した所が10箇所以上記められたという。また、大きな縄文式の竈も出土していることから大規模な縄文時代の集落があったものと思われる。しかしいったん水田化された後の発掘調査はほとんど困難であり、今回ののは場整備事業の前に破壊されてしまった。

赤穂地区の遺跡は現況を残すものは少なくほとんどが水田となっているため、十分に分布調査も行えず、面的な遺跡破壊を伴うは場整備の前に葬られてしまったことは、かえすがえすも残念である。我々の努力不足を感じると共に何かしら心のおさまらないものを覚えるものである。

中山遺跡は上穂沢川の上流、木曾山脈の山麓に位置する。昭和45年の中割原調査のおり、小地政美氏が調査した結果、遺構の一部と縄文時代晩期の土器片を多数採取した。遺跡の主体は西方森林地帯にあると思われる。

先の遺跡を南へ、南割地帯に入ると段丘上に四分一遺跡、段丘下に八斗蒔遺跡がある。開田時には住居址がかなり発見されたと土地の人が語ってくれた。博物館にも遺物が所蔵されている。縄文時代中期に属する。

大城林遺跡の対岸には藤助畑、上穂沢遺跡がある。藤助畑遺跡は、昭和45年7月調査が行われ、縄文時代中期末葉の住居址5軒と配石址など発見された。報告書「藤助畑・春日」を参照していただきたい。

上穂沢遺跡は昭和27年春、界沢伊衛門氏の墓地東の水田工事中に発見されたものである。縄文時代中期の住居址の一部と土器・石器が出土している。

大城林遺跡の調査結果は報告書の通りであるが、学門的資料を得たという、うれしきとともに、

代表的な集落遺跡を失った悲しみの入り交じった複雑な心境である。

当地方においても縄文時代中期の集落址の完掘を願って多くの遺跡の調査が行われてきたのであるが、種々の事情から集落の完全復元には至らなかった。大城林遺跡では完全な調査を期待したが、開川が行われたりしてその目的を果し得なかったが、集落址における広場・埋蔵・土器編年製作上の問題点等重要な新資料を得たことは大きな成果といわなくてはならない。

北方Ⅰ遺跡は大城林遺跡と同年次に調査された遺跡である。昭和44年、県の分布調査が実施されたとき、神村透氏によってモミの灰痕のある水神平系土器片が発見され、一躍注目される遺跡となった。ところが当遺跡は昭和28年の調査で八斗蒔遺跡に含めていたもので正式名をどうするか迷ったが、八斗蒔遺跡は開田によって壊滅しているので、県の調査の名称を採用したのである。調査結果は報告書にみる通りの成果をあげることができた。

北方Ⅰ遺跡の南に湯原遺跡がある。新発見の遺跡である。縄文時代晩期の条紋文系土器群が集中的に発見され貴重な資料となった。

横前新田遺跡は横山氏が開田中に発見したもので、焼土・石岡いぼ・木炭とともに縄文時代中期の土器片が出土している。今回の調査では遺構の確認はできなかった。

横前南遺跡は昭和47年、中央道調査団によって調査された。縄文時代中期・晩期の土器が出土しているが量は少なく遺跡の中心は用地外であると報告されている。

大城林遺跡の東、段丘下の道を南へ如米寺川をわたった段丘上に射殺場遺跡がある。昭和28年の調査の折、発見した遺跡である。その後の耕作により擾乱され遺構等はまったく検出できなかった。

大城林遺跡の東方、上総沢川右岸に羽場下・舟山遺跡がある。

羽場下遺跡は昭和46年に調査を行った。縄文時代早期、前期、土師式土器が出土している。住居址は縄文時代前期末葉のもの4基、平安時代のもの1基が発見された。詳細は報告書「羽場下・舟山」をみていただきたい。

舟山遺跡は昭和45年に国庫補助事業で、昭和46年にはは場整備事業に伴い、都合3回にわたる調査が行われた。詳細は報告書「舟山Ⅰ、Ⅱ次」「羽場下・舟山」に譲るが、縄文時代早期の小竪穴遺構群として例の少ない貴重な遺跡である。遺跡の保存を図ったが種々の事情から目的を果すことはできなかった。

養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡は、中田切川の左岸、木曾山脈の山麓にある。昭和46年、工場建設に伴い調査を行った。縄文時代中期の住居址6基、平安時代の住居址2基、水神平式土器を伴う特殊マウンドなどの遺構を始め、縄文時代早期、前期の土器が多量に出土し、山麓遺跡の研究の端緒となった。近く報告書が刊行されるので詳細はそちらに譲ることとする。

以上赤穂地区国道西の遺跡の概況を述べてあとがきにかえたい。

おわりに、南信土地改良事務所職員、市当局、博物館関係職員、また発掘に協力していただいた皆様のご厚意に感謝するとともに、本報告書の編集にあたられた博物館吉村進氏に心から感謝を申し上げる次第である。

昭和49年3月15日

調査団長 友野良一

大城林・北方Ⅰ・Ⅱ・湯原・射殿場・南原
横前新田・塩木・北原・富士山
—緊急発掘調査報告—

昭和49年3月20日 印刷

昭和49年3月30日 発行

- 編 集 駒ヶ根市赤穂2423-6市立博物館内
県営ほ場整備事業大田切地区埋蔵文化財調査会
- 発 行 伊那市山守区前橋町223
南 信 土 地 改 良 事 務 所
- 印 刷 松 川 町
松 川 印 刷 有 限 会 社